

## 附属特別支援学校におけるチェンバロを用いた鑑賞教育研究

和歌山大学附属特別支援学校：中筋千晶、  
久保田竜生、道上里砂  
和歌山大学教育学部：山名敏之  
奥山杏奈

### 【研究内容の概要】

#### 1. 題材名

耳で知る地理と歴史 ～チェンバロを聴こう！～

#### 2. 題材の目標

- ・チェンバロの発音原理と音の強弱がつかないという特性について理解する。
- ・チェンバロを実際に触ることによって現代のピアノとの相違を体感する。
- ・ドイツの楽曲とフランスの楽曲を聴き、それぞれの国民性に基づく音楽的特徴を楽しむ。

#### 3. 題材について

陸続きで隣同士の国でありながら、その国民性が全くと言って良いほど異なっているドイツとフランスの音楽をチェンバロという楽器の演奏を通して楽しむ。

#### 4. 対象 附属特別支援学校高等部の生徒さん

#### 5. 授業における電子黒板の使用

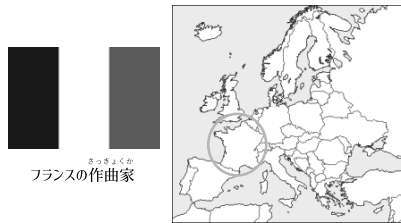
ドイツとフランスの位置関係、演奏されていた空間、建築における美意識の相違、こういった演奏に関わる諸要素については、大学院生がスライドを作成し、電子黒板で提示した。

#### 6. 授業の展開

<p>○演奏鑑賞 1 チェンバロの発音原理  ペツォールト作曲：メヌエット</p>	<p>理解すること</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・弦をはじいて音をだす。</li><li>・音質が現代のピアノとは全く異なる。</li><li>・鳥の羽軸、クイルで弦を弾く。</li><li>・現代のピアノでこの表現を再現することは難しい</li></ul>
<p>○演奏鑑賞 2 ドイツの作品</p> <p>J. S. バッハ作曲 フランス組曲第 5 番より アルマンド クーラント サラバンド</p>	  <p>ドイツの作曲家</p> 

○演奏鑑賞3 フランスの作品

ジャン＝アンリ・ダングルベール  
組曲第1番より  
プレリュード  
アルマンド  
クーラント



○演奏鑑賞4

J. S. バッハ作曲  
フーガの技法より第1番  
イギリス組曲第6番よりプレ  
リュード



ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

くみきょくだい5ばん  
イギリス組曲第5番よりプレリュード

○生徒さん達によるチェンバロ体験



【取り組みの成果】

1. 演奏を聴いて感じたことを書こう。

- 久しぶりに聴いたけどいい音。チェンバロはうつくしい楽器だとおもいます。
- はじめてきてとてもたのしかった。また機会があれば聴こうかなと思います。
- 良い音すぎて眠たくなりそう。
- ゆったりした曲とリズムが速い曲があったのでそうちがうのだなーと思いました。
- 推測だが音の感情
- フランスはおしゃれな音でドイツは暗い音
- フランスのルール？とドイツのルール？がちがっていてびっくりしました。
- フランスは音にポップとかおしゃれさを感じたんですけど、ドイツは音に重みと言うか、深刻そうな音を感じました。
- プレリュード、アルマンド、クーラント、サラバンドは舞踏会で踊られてそうなどもおしゃれで聴いていてとても気持ちが良かったです。それとは対照的にバッハのフーガの技法は、とても悲観的で何かを伝えよう、訴えようとしているようなとても重圧的な音でした。

## 【総括】

- 全体で 90 分近いイベントであったにもかかわらず、静寂を保ち、熱心に聞き入っていた。
- チェンバロに一人一人が触れ、みな積極的に思いおもいの曲を演奏し、チェンバロの音色を楽しんでいた。
- もっとも気に入った曲としては、イギリス組曲の第 6 番のプレリュードが採り上げられていたが、並行してフランスのダングルベールの組曲にも触れ、オシャレな音と感じる生徒さんが複数存在していた。このことから音楽の性格を直感的に把握に、そこに込められた感情を対比させる力があることが、理解される。
- 上記を踏まえ生徒さんから多様な考え・思いを引き出すための問いかけ、鑑賞教材の選択、提示方法を引き続き検討していく。

【演奏会の様子】



【楽器に触れるコーナーの様子】

